

帰国児童の日本語獲得と英語保持 についての縦断的研究

小林 恵

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

＝ 目的 ＝

帰国児童が学年相応レベルに日本語を獲得するのにどのくらいかかるのか、文法のどのような面の獲得が難しいのかを同年齢の一般児童との比較をとおして明らかにする。

英語圏からの帰国児童を対象に、英語力の保持伸長は果たして可能なのか、英語の形態素と語順がどの程度保持され、どの面から減衰していくかを明らかにする。

生育環境や親の考え方についての質問紙調査を行ないそれらが日本語獲得、英語保持過程にどのように関わるのかを検討する。

＝ 方法 ＝

【語彙力と文法力調査の対象者】

日本語の調査については、帰国児童4、5年生18名、一般児童4、5年生31名を対象に実施した。英語の調査については、英語圏から帰国した17名を対象に実施した。

【質問紙の対象者】

上記の帰国児童18名とその保護者17名

【材料】

芝式語彙検査：日本語語彙力の測度として使用した。

Peabody Picture Vocabulary Test - Revised (PPVT-R)：英語語彙力の測度として使用した。

日本語文法力テスト：使役、受身など10の文法規則について、文法的誤りを含む文と正しい文がランダムな順序で吹き込んであるテープを対象者が聞いて、正誤判断するというテストを開発し、使用した。

英語文法力テスト：形態素、語順を含む12の文法規則について、日本語文法力テストと同様の方法で開発したテストを使用した。

【調査時期】

日本語、英語ともに語彙調査は'95年6月から6ヵ月おきに、文法力調査は3ヵ月おきに実施した。現在のところ、6月から今年3月までの4回分の結果がでているが、今後も追跡調査を重ねる予定である。

＝ 結果と考察 ＝

1. 日本語語彙力、文法力の獲得

学年ごとに学級×実施時期の反復測定分散分析を行なったところ、学級の主効果($F(1,29)=27.2, P<.01$)と実施時期の主効果($F(1,29)=22.59, P<.01$)が有意だった。日本語語彙力は帰国児童も伸びているが一般児童も伸びているために、追いつかないことが示唆された。

一方、日本語文法力については、3回目の調査までは帰国児童と一般児童の成績の差は徐々に縮まっていたが、4回目で帰国児童の成績が下がり1%水準の有意差があった。なぜ、ここで成績が下がったのか、またこれが一時的な落ち込みなのかどうかは、今後の追跡調査の結果を待って考察したい。

2. 日本語文法のどのような面の獲得が難しいか

文法規則ごとに平均値の差の検定をして帰国児童が一般児童の成績に追いつきにくい文法規則を調べたところ、4回の調査をとおして獲得が難しかった文法規則は助詞であった。とくに、方向の「へ」と場所の「で」の区別が難しいという結果であった。

3. 英語力の保持伸長は可能か

英語語彙能力は有意ではないが、成績は下がっていた。一方、英語文法力は4回目の追跡調査で下がってきているが、比較的保持されていた。

4. 英語文法のどのような面から減衰がおこるか

語順や他の文法規則の成績が下がっていないにもかかわらず、4回目の調査で形態素(morphology)が1%水準で有意に成績が下がった。

これが一時的な落ち込みなのかを知るには、今後の追跡調査の結果を待たなければならないが、先行の知見からその獲得には生物学的制約があるといわれている(Newport, 1989, 1990, 1991)形態素の成績だけが下がったのは、意味があることのように思える。

5. 日本語獲得、英語保持に関わる要因

日本語保持努力や英語保持努力といった意識的要因よりも、出国時年齢や帰国後期間などの発達の要因が関わるということが明らかとなった。